２０１５年
１月１日
No. ８８
隔月１回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

# ひきこもり

今年一年がみなさまにとって良い一年になりますよう願っています

（このイラストは、道北地区に住むひきこもり当事者へ送る絵はがきのデザインとして描いてもらいました）
イラストレーション　高津達弘

Ｉｎｄｅｘ

2ページ　活動報告　ひきこもりピア・サポーター養成研修事業終える
3ページ　活動報告　リンケージプラザ最後の通常例会、ゼロから始める模型教室
4～5ページ　道産こもり 179 大学
ひきこもり経験者が先生になり、これからの生き方を語る
6ページ　重荷をおろして未来を拓く（後編）　小西　恵司
7ページ　リポート Now　雑談会 in 札幌学院大学
8ページ　こちら事務局

## ひきもりピア・サポーター養成研修事業終える

ひきこもりへの理解啓発とピアな視点で当事者と関わる人財を養成することを目的に２０１４年８月から道内各地で続けてきた「ひきこもりピア・サポーター養成研修事業」（平成26年度公益財団法人 日本社会福祉弘済会社会福祉助成金事業）が、函館市と帯広市で開催され、全ての研修事業が終了した。

11月14日、函館市で開催された研修事業には、19名が参加した。

２００３年から「道南ひきこもり家族交流会・あさがお」事務局に携わる野村俊幸氏は、自身もかつて不登校の子どもを持つ親の立場から、長く不登校ひきこもり支援を行なってきた。

野村氏は、「家族会では、精神科との連携により専門家もサポートするが、あくまでも親同士が語り合うことがとても大切」と強調し、悩みをもつ親が家族会に参加してどのように変化するかについて「話すことで、気持ちが軽くなり、親自身の気持ちの整理ができる。不安の気持を語ることで心が軽くなる」と説得力ある語り口で悩んでいる親や家族に対して参加を求めた。

函館で開催された研修事業には当事者会「樹陽のたより」から当事者も駆けつけた。

函館市在住で、ひきこもり経験談を語る藤田敦久氏は、ひきこもりから復帰した現在、資格取得のために勉強を続けているが「将来に対する不安が消えることはない」と手探りで歩いている現在の心境を語った。「社会のせいにするつもりはないが、一人ひとりの違いや弱さ、表面的にはわかりにくい心の動きを理解してほしい」。いち当事者である藤田氏の言葉は、親や家族、支援者に対してひきこもりが存在することの重みを説いていた。

続く12月6日帯広市で開催された研修事業には、17名が参加した。

ひきこもりピア・サポーターの役割について田中敦理事長は「訪問支援だけではなく、ひきこもりの正しい理解や啓発を促す学習会で、体験談発表をすることも重要な役割だ」と指摘し、体験談を聞きたいという声が家族にも多いことが述べられた。

５年前からひきこもり当事者の居場所として「リカバリースポット」を運営する作業療法士の酒井一浩氏は、ひきこもり経験者でもある。

運営する居場所について、そこに居続ける参加者が停滞する課題があるため、ステップアップするために理解ある農家と連携して当事者を受け入れてもらう取り組みも行っている。

最後に酒井さんは、「ひきこもりは悪いことなのかという疑問符を常に持てる支援者でありたい」と支援者として心境を語った。

いじめ、不登校、離職、そしてひきこもり。帯広市在住の経験者・白木明人氏は、ひきこもり後の生活について「地獄のような明日がまた来る。夜寝るのが怖かった」と当時を振り返る。

精神科で「発達障がい」と診断されたことが転機となり、少しずつ人間関係を構築することができた白木氏は、「初めて友達と呼べる人と出会えた時は泣きました」と語る。現在は、就労継続支援事業所に通いながら、「リカバリースポット」の運営にも関与している。

ファシリテーターとして札幌から参加したひきこもり経験者は、「社会活動として自分を活かす場であると同時に、現実逃避のように遠方へ旅ができ、普段の生活から解放されるので、やりがいを感じる」と感想を述べた。今後研修事業の内容をまとめたリーフレットを3月までに作成して、道内の支援機関を中心に配布する。

### *函館・帯広　支援機関紹介*

**道南ひきこもり家族交流会「あさがお」**
家族の「ひきこもり」に悩む方や当事者が集い語り合う場。臨床心理士などもサポーターとして参加。
連絡先・函館渡辺病院医療福祉課（森・越野）0138-59-4198 または野村俊幸 090-6261-6984

**リカバリースポット**
ひきこもりの人たちが交流し悩みを語り合う居場所。30~40 代のひきこもり経験者が運営する。連絡先・おおえメンタルクリニックゆう　酒井一浩 0155-20-5400

## ＳＡＮＧＯの会
### リンケージプラザ最後の通常例会

２０１４年12月３日、７年間使用してきたリンケージプラザ・ボランティア研修室で開催する最後の通常例会（右写真）。この日参加した11名は、長年親しんできた白亜の建物に別れを告げた。

ある参加者は「４階にある博物館を見学した。夜間に探検すると面白そうだ」と元病院だった現在の会場に興味を示した。壁の色を見て「ともかく白い」と端的に述べた意見に笑い声がどよめく場面もみられた。また、「たまに来ると、一階の案内ボックスにいる女性が挨拶してくれて、とても嬉しかった」、「当事者会以外でもよく利用した。他者との関係をつくる良い場所だった。名残惜しい」など、リンケージプラザならではのエピソードが出され、それぞれの参加者は、思いを言葉に表していた。

田中敦理事長は「ひきこもり者の持つ特性を社会との架け橋にしていけるような『ひきこもり人財バンク』構想を述べた。最後に参加者全員で記念撮影。今年最後の通常例会が終了した。

リンケージプラザで開催する最後の例会には２年振りに参加した人や、女性の参加者が目立った。

### SANGOの会 in リンケージプラザ　思い出のアルバム

2007年発足当時の模様。第一回参加者は３名だった。

2009年当時の例会の模様。最盛期には15名を超す参加者があった。

2012年４月の例会では、ボランティア活動センター職員からボランティアについて説明を受けた。

## ゼロから始める模型教室

ひきこもりの経験者たちで、模型づくりに挑戦。全労済地域貢献助成金事業「ひきこもり当事者参画型創造的社会参加促進事業」として「ゼロから始める模型教室」（全五回）の第一回が２０１４年12月15日、札幌市内の公共施設で開催された。

この日参加したひきこもり経験者２名と田中敦理事長は、ＳＡＮＧＯの会参加者で、プロ顔負けの模型づくりの腕前を持つ七澤広氏の指導の下、熱心に模型づくりに没頭していた。

「サスペンションを先に色塗りましょう」と七澤さんに言われ、黒のポスターカラーの入った瓶に筆を入れた田中敦理事長は、「懐かしい匂いだね」と子どもの頃に戻ったかのように黙々と色を塗り重ねていた。その横では、もう一人の参加者が、初心者とは思えないような手際の良さでてきぱきとパーツを外し、組み立てていた。

つくられた模型は、５月に開催する「北海道ひきこもり芸術展」に出品する。この他、イラストや写真など多彩な作品が出品される予定。（７ページ参照）

20年振りの模型作りに挑戦する田中敦理事長。

# 重荷をおろして未来を拓く（後編）

ＳＡＮＧＯの会　小西　恵司

大学を卒業して３年目。時間が自分の心境を変えたのか、このままでは自分の人生が他人に食い潰されて終えるだけ。他人に一矢を報いたいという、ヤンキーに似た反発心が芽生えてきた。引きこもりとはいえ、本を読むのが好きだった私。頭の中にボキャブラリーは、ある程度あった。

そこで選んだのが、コールセンターという仕事だった。自分なりの言葉で話そう、そう単純に思って決めた職場だった。現実はとても厳しいものではあったが、約７年間も仕事を続ける事ができ、管理職も経験できた。

学生時代、社会はそんなに甘くは無い、と散々言われて育ってきたが、甘くないと思ってしまえば、そんな世界に支配されやすくなるし、柳に風でなるようになるさ、と思えば その立場に自分の身を置き易くなる。自分の思考の癖が強迫観念を作り、現実を生き辛くさせてしまう事が往々にしてあると、身に染みて分かった。

でも私は今でも、他人に怒られた瞬間、重い罪の意識に支配されるし、なかなか仕事を断る勇気を持てず、他人の顔色ばかりを見るのが癖になっている。インスタントラーメンのように３分待って出来上がった美味しい結果など、人生には無いのだと思う。数十年積み上げた人生のベースを、数年で変える事など、思い上がりが過ぎる話。これからも四苦八苦するだろうが、一つ間違いない事は、３年間のひきこもり生活をしていた、あの時の自分とは一味違う、何かを得ているのは確かだ。

話は変わるが、北海道の女子生徒が祖母と母親を殺害する、というニュースがあった。先輩としても頼れる存在で、生徒会長になれるほどの優秀な生徒さんだったようだ。しかし、他人から評価を得るという事は、その分だけ何かを背負い、犠牲を払っている。

学生は兎角、社会道徳を含む正論を巧みに使えば、他人に支配されやすい。「若い頃の苦労は買ってでもしろ」、と説教をする事で格好は付くが、裏側では、他人を動かす事で自分を楽な立場へ置くその口実として利用される側面があるのも、また一つの真実でもある。

「いい子」とよく表現するが、いい子、とはどんな子供なのか。私も含めて大半の人は、いい子とは自分にとって都合のいい子、であり、自分の利害関係なくして純粋に評価してくれる人はあまりいない。急に手の平を返して、「いつからこんなに悪い子になったの？」と説教をする事などよくある。

人は強い立場を獲得すると謙虚さを失い、他人に対する手厳しさのアクセルを全力で踏み込む。社会道徳を言えば自分に正当性も付き、さらに拍車がかかる。程よくブレーキをかける謙虚さも忘れたくは無い。その為にも、日々心に入れている言葉が私にはある。

『人は師なり、
　子は親なり、親は神なり』

プロボクサー辰吉丈一郎さんが、以前テレビで語った辰吉さんのお父様の教えだ。親側が子を丸め込むのなら、親は神なり、だけを強調されるのだろうが、全体を見渡すと学ぶ謙虚さを宿す言葉だと分かる。他人はすべて人生の師匠、我が子は親を育てる親であり、産んでくれた親は尊い存在。この言葉を胸に秘め、曲がりなりにも、願わくはいつか私も親としての人生を選ぶ、その日に向けて歩を進めたい。

## 会 員 募 集 しています

レター・ポスト・フレンド相談ネットワークは若者の範疇に入らない成年・壮年期のひきこもりへの対応に軸足を置きながら、ひきこもり者が社会に出た時、自信や希望を持ちながら歩めるような新しい働き方を、当事者自らが創造しています。

ぜひ多くの方々に、私たちの活動の趣旨を理解していただき、ひきこもり者が自信をもって生きていくことのできる、新しい社会のあり方をみなさんとともに追求していきたいと考えています。

### 会　費

| 正会員 | 賛助会員 | 寄付金 |
|---|---|---|
| 入会金　1,000 円 | 入会金　1,000 円 | 一口　1,000 円～ |
| 年会費　3,000 円 | 年会費　2,000 円 | |

入会金、会費納入は、下記郵便振替口座へのお振り込みでお願いします。

# 道産こもりず１７９大学

## ひきこもり経験者が先生になり、これからの生き方を語る

ひきこもり経験者が先生となり、ひきこもりから新しい生き方や知恵を学ぶために開催された「道産（どさん）こもり 179 大学」（平成２６年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）が 2014 年 11 月８日札幌市内の会場で開催され、当事者、経験者、家族、支援者ら 69 名が参加し、前段のフリージャーナリストの池上正樹氏の講演に引き続き先生として登壇した３人のひきこもり経験者たちが講義した。後半行われたワークショップでは、講師の話を踏まえ参加者がグループに分かれそれぞれの立場で意見を出し合い、ひきこもりの課題や今後の展望を語り合った。

写真 1）全国の動きを紹介した池上正樹氏

### 開会宣言

開催に先立ち、経験者の藏谷俊夫氏が開会宣言を述べた。藏谷氏は当団体が主催する当事者会 SANGO の会のメンバーで、道産子とひきこもりを掛け合わせて創作した「道産こもり 179 大学」の命名者として、得意のイラストを活かしてタイトルロゴのデザインまで担当した才人。藏谷氏は、７年間のひきこもり生活後入所したグループホームを辞める時に受けた施設長からの厳しい言葉が人生の中で最も腹立たしいことだったと述懐した。「働かざるもの食うべからず。この世には生きる価値のない人間もいると施設長から言われた。いかに人間を分別することが不毛の議論であることを知る原体験だった」と力強く聴衆に訴えた。「働いていないというだけで、犯罪者のように糾弾される人、自分を粗大ゴミだと思い生きることに負い目を感じる人もいるだろう。しかしその一方で苦しい思いをした中で考えてきたことや、育んできた価値観もあるはず。道産こもり 179 大学では、そのような価値観や知恵を思い切り吐き出してほしい」とひきこもり者として生きていく哲学を述べた。

### 講義Ⅰひきこもり大学の全国的な動向

まず講義Ⅰではフリージャーナリストの池上正樹氏（写真 1）が「ひきこもり大学の全国的な動向」について話した。ひきこもり大学とは、2013 年９月に東京でスタートし、大阪、神戸、名古屋でも開催されてきた。定まった校舎や講師が存在するのではなく、関心ある人たちが自主的に運営しているオープンキャンパス。池上正樹氏はこの大学の発足当時からサポートを続けている。

池上氏は、ひきこもりの人たちと支援の間にあるミスマッチの問題を取り上げ「特に地域若者サポートステーションでは、ひきこもりの人たちを就労させて数値として就労実績を上げることが、評価の対象としている点が問題だ」と指摘。ひきこもり当事者には行き場所が必要であり、上意下達のような一方向で支援するのではなく、支援者と当事者だけではない一般社会の人たちとも対等に対話ができる場としてフューチャーセッション（対話によって未来を作り出す）を有志で立ち上げた。

このフューチャーセッションに参加する当事者のアイデアからひきこもり大学構想がうまれた。当事者たちが上からの目線でトレーニングを受け、カリキュラムを押し付けられるのではなく、当事者たちの思いを丁寧にくみ取る中で出てきたアイデアが、ひきこもり経験者が先生となり周囲の人が生徒になるという逆転の発想だった。当事者それぞれの生きざまや特性は違うため、ひきこもり大学では、当事者の想いが込められた学部、学科名を付けて授業してもらう。初めて開催したひきこもり大学では女性当事者が「生きていたいと思えるようになりたい学科」と名付けられた。このように、ひきこもり大学では、ひきこもり当事者の気持ち、経験を理解してもらいネガティブにとらえられる空白の履歴にも価値があることを理解してもらうことを主眼に開催されている。

### 講義Ⅱひきこもり大学１７９大学

続く講義Ⅱでは、道内外で活躍するひきこもり経験者３名に登壇してもらい、それぞれの生き方を話してもらった（5 頁掲載写真２参照）。

**『ひきこもり当事者の社会参加を考える学科』**「いつもと違う舞台でたいへん緊張している」と挨拶した武田俊基氏は、当法人理事者として道内各地でひきこもり支援の集りを開催する地域支援活動を行なってきた。「ひきこもりで悩んでいる人の発見や、悩んでいる人のニーズを探り情報提供を行なう。このような活動はとかく社会経験の乏しい私たちがひきこもり経験値を活かして取り組む社会参加方法の一つだと思う」

写真2）各学科発表した講師

と述べた。武田氏は親の会に誘われたことがきっかけで、当事者会へ参加し人間関係を増やしてきた。そして現在のような活動を気が付いたら行えるまでに成長していたという。「何らかの社会資源とつながることで、ひきこもりの経験を活かしていく方法はあると思う」とこれまでの経緯を振り返りながら、焦らず自分のできることをこなしている。

**『幸せな生き方研究学科』**の講師・田中透氏は、「僕はひきこもって、心の病をもっていたけど、その窮地に追い込まれた中で、明るい言葉を発し笑顔をつくる練習をしてきた。そのような些細なことでも自分にできることを実行することが、辛い状態から回復するために必要なことだった」と語り、受験の挫折や発達障がい、ひきこもりから脱し心が明るくなった理由について話した。また「顔色を良く見せることも大切で、外側を元気に見せることで内側も元気になれる」と説明し、「今胸ポケットに付けている光るアクセサリーも自分を輝かせ元気になるためのグッズだ」と語った。

これまで読んできた本から得た知識が自分を元気づけることに成功したという田中氏は、現在「函館圏フリースクールすまいる」事務局長として道南地区を中心に活動を展開している。

**『NPO 法人設立学科』**の講師は、兵庫県で活動するNPO 法人グローバル・シップスこうべ代表・森下徹氏。森下氏は子どもの頃から人から疎外されているような不安感が強く、高校卒業後の２年間と大学卒業後の 14 年間ひきこもりを経験した。その後、ひきこもり支援機関に通う中、森下氏を理解する仲間が増え、人に役立つ体験ができたことも追い風となり 2006 年６人の当事者とともに NPO 法人を立ち上げることにつながった。

森下氏は「NPO 法人の立ち上げは手続き上の大変さはあるが、役員を確保し１万円程度の費用でできる。立ち上げを手伝う NPO 法人もある。何よりも情熱があれば良い」と、NPO 法人設立がそれほど難易度の高くない社会参加の形態であると述べ、「所属・肩書ができたこと、事業拡大で外部とのつながりを持てたことが法人立ち上げのメリット。組織ではうまくいかない人でも、何とか生きていける」と語る森下氏は、NPO 法人をひきこもりの経験を活かし社会と結ぶ起業のあり方の一つだと位置付けた。

## ワークショップ

講義終了後、参加者は 6～7 名のグループをつくりワークショップが行われた。そこで話し合われた３名の講師への質問では「ポジティブになれる方法を知りたい」「ひきこもりに逆戻りしない工夫をしているのか」など付箋にびっしりと書かれた質問を池上正樹氏が読み、講師一人ひとりが答えた。

最後のグループ発表では、「強引にでも前へ進め」と言われる就労支援機関に通う当事者の悲痛な訴えや、「ひきこもりのもつ苦しみが尽きるまで時間がかかるので、身近にいる家族や社会は待つ姿勢が肝要」と、ひきこもりに理解を示す意見もみられた。

会場の後方には親の会や、支援団体が小物などを紹介するブースを設置したほか、初めて参加した当事者が疲れたら逃げれる休憩室をつくる配慮も行なった。当日はテレビ取材、新聞取材もあり、ひきこもりに抱かれるサイレントなイメージを見事に払拭した賑やかな交流の祭典となった。


**電話相談室ちいサポ** ✿

病院でワーカーをして来た相談員・電話相談専門員・職業相談員・福祉関係の仕事で世話人をしていた相談員など相談現場での仕事を長く続けてきた仲間たちが集まりました。微力ですが、働く人のためには休日の夜の相談時間が必要、一人暮らしの方のためにも夜の電話相談が必要など、夜間の必要性を重視しスタートしました。

相談料はかかりません。一度お電話してみてください。

011－741-1901　土曜日17:00～22:00（受付は21:30まで）着信専用

一回線のため、お話中の場合は少し後でおかけ下さい。



**皆様からの投稿をお待ちしています**

〒０６４－０８２４　札幌市中央区北４条西２６丁目３－２

「NPO 法人　レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局　通信編集部　宛

ｅ－ｍａｉｌ；info@letter-post.com

## リポート NOW 「雑談会 in 札幌学院大学」

江別市にある札幌学院大学には、発達障がいやひきこもりなど生きにくさを感じる在学生が集える全国的には珍しい学内当事者会があり、12 月 18 日木曜日「雑談会 2014 年度第 7 回」に参加してきました（写真）。当日は学生さんたちが 10 名ほど集まり差し入れのお茶とおにぎりやおやつを食べながらお互い交流を図りました。筆者におやつ下さった学生さんご馳走さまでした。

当日の集まりではまず初めに参加者それぞれが近況報告を述べた後、「今日ここで話題にしたいこと」をテーマに、①全学教養科目で何か面白い授業ってあるの。②年末年始の迎え方についてみんなはどうするの、について話し合いました。

①では、教養ゼミの Y 先生の授業は白石区のフリーペーパーをつくる企画や学食ベスト 10 などの動画づくりをしている、という興味を抱く情報提供があったり、M 先生の授業は面白いね、という発言には、M 先生は学生時代、落語研究会だったからねと楽しい笑い声があったりと、学内の当事者会の強みを活かした有意義な情報交換が相互になされていました。

また迫ってきた定期試験の話題も出され、試験にはペーパーテストとレポートがあるけど、レポートは自分の考えを取り込めてそれが評価の対象になっていくのでやっぱりいいな、という意見がある一方で、興味関心のない科目だとレポートはやはりつらいなあ、ペーパーテストのほうがよかったというときもあるなど学生ならではの意見交換がなされました。そして「大学の授業では楽しいのは 1 つか 2 つあればよい。そこで学ぶきっかけができる」という二通諭教授からのアドバイスがありました。

②では、実家に戻るという発言が多かったですが、お正月は美味しいものが食べることができるが、のどに餅をつまらせないようにしないとね、と冗談交じりのシーンもあり、終始和やかな雰囲気で会話は進行していました。次回は、2015 年 1 月 15 日午後 4 時 30 分から行なわれます。在学生であれば参加できます。問い合わせは札幌学院大学二通研究室まで。

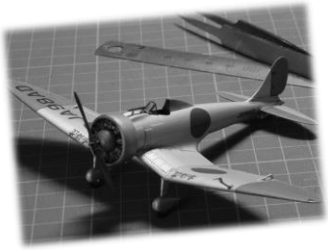
（田中　敦）

---

# 北海道ひきこもり芸術展

**2015年5月16日～17日 札幌市教育文化会館ギャラリーで開催**

**作品を募集しています**



5月16～17日の2日間にわたり開催される『全労済社会貢献助成金事業・北海道ひきこもり芸術展 in 札幌』にイラスト、模型、写真、小説、エッセイ、俳句、短歌、詩、書道、その他、あなたの作った作品を芸術展に出品しませんか。出品の条件は、ひきこもり当事者、経験者であること、未発表のオリジナル作品であることです。出品希望の方は、当団体事務局までお問い合わせください。現在有志で「ゼロから始める模型教室」を開催中です。

**この会報は札幌市・さぽーとほっと基金「札幌圏ひきこもり理解啓発広報誌作成事業」によって作成されています。**

さぽーとほっと基金は、皆さんからの寄附を札幌市が募り、町内会・ボランティア団体・NPO などが行うまちづくり活動に助成することで、札幌のまちづくり活動を支える制度です。皆さんの善意の気持ちが、札幌市民のまちづくり活動を支え、札幌のまちをさらに住みよいまちに変えていきます。

## こ ち ら 事 務 局！　　今後の動き(2015 年 1 月～現時点)

◆「SANGO の会」新春例会のご案内
２０１５年１月は下記日程にて行ないます。初めての方も参加できます。概ね 35 歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、下記の期日とは別に例会を設定しますので、事務局までメール、電話でお問い合わせ下さい。

と　き：2015 年１月7日（水）午後1時 15 分から午後3時３０分まで
会　場：札幌市社会福祉総合センター　３階　第２会議室
場　所：札幌市中央区大通西 19 丁目
参加費：無料
参加条件：ひきこもり当事者または経験者とその家族
参加方法：直接会場へお越しください。（事前申し込みは不要です）

◆公益財団法人北海道地域活動振興協会・平成 26 年度ボランティア活動支援事業
道北旭川圏ひきこもり当事者会創設支援事業「ひきこもり大学旭川校」開催のお知らせ
とき：2015 年１月 24 日（土）13:30～16:30
会場：旭川市ときわ市民ホール　４階 多目的ホール２（旭川市５条通り４丁目）
交通機関：ＪＲ旭川駅から徒歩 15 分
テーマ「当事者会創設学科～私の人生の、長い孤独、少しの後悔と、当事者会」
講師：藏谷 俊夫先生（SANGO の会・精神保健福祉士）
コーディネーター：田中 敦理事長
主催：NPO 法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク
後援：子ども・青年・家族を支え合う「旭川そよ風の会」
申込方法：直接会場へお越しください。（事前申し込みは不要です）

◆札幌市社会福祉協議会１日福祉セミナー「ひきこもりについて考える」開催のお知らせ
とき：2015 年2月１８日（水）13:30～15:30
会場：札幌市ボランティア活動センター研修室（札幌市中央区北１条西９丁目リンケージプラザ２階）
交通機関：地下鉄西１１丁目駅下車徒歩８分
講師：田中 敦（NPO 法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク理事長）
受講料：500 円
申込方法：事前申し込みが必要です。札幌市ボランティア活動センターまでお問い合わせください。
TEL(011)223-6005

**☆刊 行 物 の 紹 介☆**
**苦労を分かち合い希望を見出すひきこもり支援**
**～ひきこもり経験値を活かすピア・サポート～　田中　敦著**
本体 1800 円＋税 A5 版 156 ページ　学苑社
**団体に直接お申し込みの方のみ、1,800 円【送料別途】で頒布しています。**

### ☆ 編 集 後 記 ☆
2015 年新しい年がはじまりました。永年親しんできたリンケージプラザが解体されることになり今年からは札幌市社会福祉総合センターが新しい会場となります。１月７日に開催する新年最初の SANGO の会では「新春書初め」を行なうことになっていますが、今年はどんな文字が登場するのか楽しみです。次号の会報でお届けできるものと思います。今年一年もどうぞよろしくお願いします。
（発行責任者　理事長　田中　敦）

無　断　複　製　はおやめください